

市制60周年記念企画展

戦争遺跡 を掘る。

～鈴鹿市が生まれた頃～



鈴鹿市考古博物館

Suzuka Municipal Museum of Archaeology

2002.7.20～9.16

鈴鹿市の旧軍施設

鈴鹿海軍工廠

海軍工廠は、明治36（1903）年に横須賀・舞鶴・呉・佐世保の各鎮守府に設置されたのがはじまり。軍艦や機銃などを生産する軍需工場でした。以後、広・豊川・光・川棚・鈴鹿・沼津・多賀城・高座・津・相模の各工廠が開設されました。

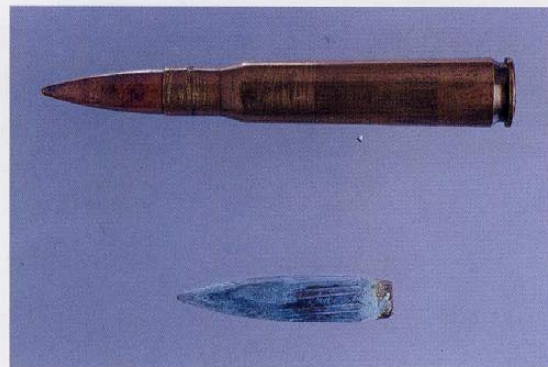
鈴鹿海軍工廠は、昭和17年に設置され、鈴鹿市成立の中核的施設として位置付けられていました。敷地面積は関連施設を含め439万㎡に及び、従業員数は、一般工員8000人、動員学徒及び女子挺身隊2000人、計1万人にのびりました。総務・会計・医務・機銃・火工の5部からなり、関連施設として海軍共済病院・官舎・工員住宅・発射場などがありました。現在旭化成がある機銃部では航空機に搭載する旋廻機銃や固定機銃が生産され、本田技研のあたりにあった火工部では弾薬包が製造されていました。



鈴鹿海軍工廠ポスター（複製）



移設された海軍工廠正門の銘板
正門は旭化成とベルシティの交差点にあった



13mm機銃弾
上：豊川海軍工廠のもの 下：上箕田遺跡（鈴鹿市）出土



秤
火工部で使われていたもの

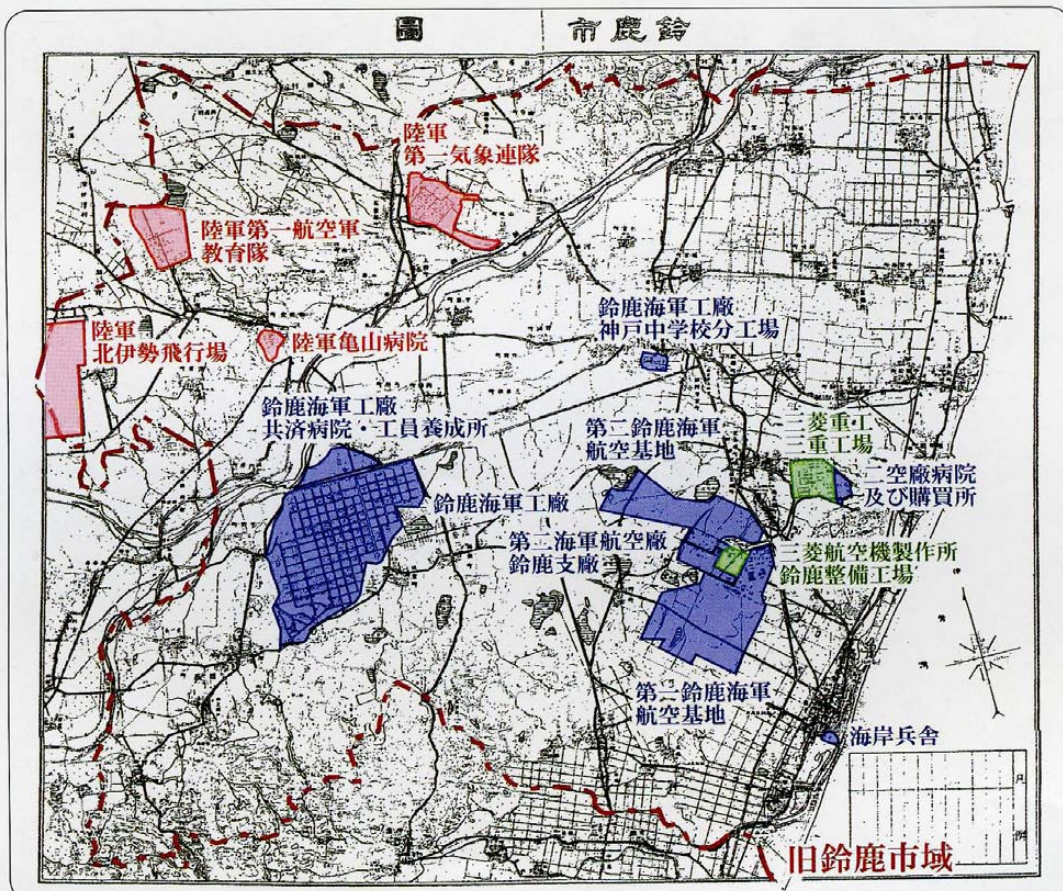


薬瓶・乳鉢・乳棒
火工部で使われていたもの

鈴鹿市が、明治22（1889）年の市町村制施行以後全国198番目、県内では7番目の市として発足したのは昭和17（1942）年12月1日のことでした。国府村・庄野村・高津瀬村・牧田村・石薬師村・白子町・飯野村・河曲村・稲生村・玉垣村・神戸町・箕田村・若松村・一ノ宮村の2町12か村が大同合併したものです。中心市街地を持たない新しい市の中核となったのは、軍事工場や飛行場などの陸海軍施設でした。戦後、市としての使命を失っているとして分離解体を求める意見がありましたが、広大な旧軍施設には企業の誘致が図られ、隣接村等の編入合併を経て今日に至っています。

市制60周年を迎えるにあたり、市内に残る軍事施設や伝世資料から“軍都鈴鹿市”を振り返り、鈴鹿市及び近隣における戦跡考古学の成果を集めてみました。

鈴鹿市 図



鈴鹿市内の主な軍事施設 昭和21年鈴鹿市都市計画図から作成



消火栓 海軍航空基地にあったもの



制水弁筐



海軍用地標柱 旧海岸兵舎の南に現存

鈴鹿海軍航空隊

昭和13（1938）年、第一鈴鹿海軍航空基地内に設置されました。同基地は現在のN T T 鈴鹿研修センター跡地から大東紡績・白子中学校付近にまで及び、県道亀山鈴鹿線沿いに滑走路が設けられました。この基地では、通信偵察飛行の教育・訓練や航空機の試験飛行が行われました。訓練には九三式中間練習機や白菊が使用されていたほか、九〇式機上作業練習機・零式艦上戦闘機・局地戦闘機雷電・艦上爆撃機彗星・九七式2号艦上攻撃機・九九式艦上爆撃機・陸上爆撃機銀河が配備されていました。N T T 研修センター跡地内には今でも衛兵所や射撃場・第三～第五格納庫の跡が残っています。

富士電機鈴鹿工場や味の素ゼネラルフーズ鈴鹿工場のあたりには三重海軍航空隊の専用飛行場として建設された第二鈴鹿海軍航空基地がありました。1001空（海軍雁部隊）が配備され、航空機・軍用資材・兵員の輸送が行われました。記録によると艦上攻撃機天山・彗星・一式陸上攻撃機・零式輸送機・零戦などが集積されていたことが知られています。千代崎中学校・鈴鹿医療科学大学の付近にあった第二海軍航空廠鈴鹿支廠三菱重工三重工場では、零戦や雷電などの組立てが行われ、第二航空基地で試験飛行が行われていました。三菱重工名古屋航空機製作所鈴鹿整備工場があった鈴鹿高専の西には関西急行電鉄二空廠引込線のプラットホームが残っています。



飛行手袋・飛行帽・航空時計



引込線のプラットホーム 国立鈴鹿高専の西側に残る



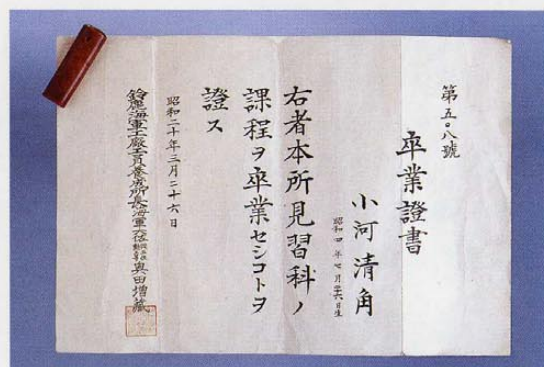
ヤスリ・ゲージ・打刻器 機銃部で使われていたもの



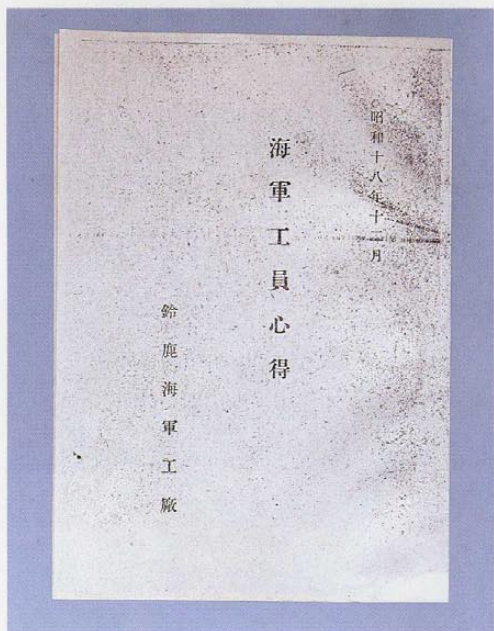
木製食器 海軍章と「鈴鹿」の文字が記されている



防空壕入口 海軍工廠共済病院跡地に残る



鈴鹿海軍工廠工員養成所修了証書・工員印



海軍工員心得（複製）

戦局が悪化した戦争末期になると海軍工廠は、鈴鹿郡関町・岐阜県高山市・神戸中学校（現三重県立神戸高校）・松阪工業学校（現三重県立松阪工業高校）・石川県大聖寺町（現加賀市）に疎開しました。



山の手発射場着弾場 機銃の発射試験に使用された



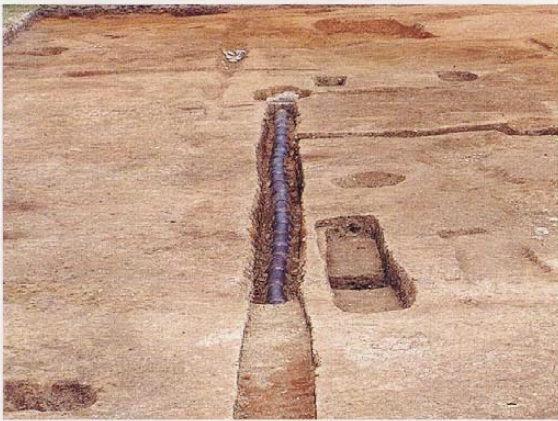
海軍用地標柱 旧鈴鹿海軍工廠用地の西に現存

陸軍第一氣象連隊

鈴鹿川以西の地域には陸軍の施設が多数設けられました。県立石薬師高校や消防学校がある石薬師町には陸軍第一氣象連隊（陸軍中部第131部隊のちに陸軍東海第555部隊に改編）がありました。昭和17年に設立され、陸軍唯一の氣象教育機関として約3万人ともいわれる氣象隊員の養成が行われました。当時の建物は現存していませんが、消防学校の建設に先立って発掘調査が行われ、建物基礎や排水溝・通信ケーブルの埋設管が見つかり、陸軍章が染め付けられた軍用食器や統制番号が付された瓦などが出土しています。



陸軍第一氣象連隊の空中 この空中写真は、米軍撮影の空中写真を国土地理院長の承認を得て複製したものである。(承認番号 平14総復、第136号)



排水溝 三重県埋蔵文化財センター提供
陸軍第一氣象連隊のもの



通信ケーブル管 三重県埋蔵文化財センター提供
陸軍第一氣象連隊のもの

亀山陸軍病院

国立療養所鈴鹿病院や県立杉の子養護学校のあたりには亀山陸軍病院が設けられました。昭和17年の創立です。陸軍用地の標柱が残っています。



陸軍用地標柱 亀山陸軍病院の敷地を示す



正門衛兵所



射撃場跡



鈴鹿海軍航空隊司令室の扉 香良洲町歴史資料館に移設保管されている



鈴鹿海軍航空隊点鐘台 香良洲町歴史資料館に移設保管されている



第一鈴鹿海軍航空基地第4格納庫

白子の紅屋橋付近には海岸兵舎があり、救難艇などが配備されていました。旧兵舎の境界標が今でもわずかに残っています。

発掘された戦争遺跡—旧軍施設—

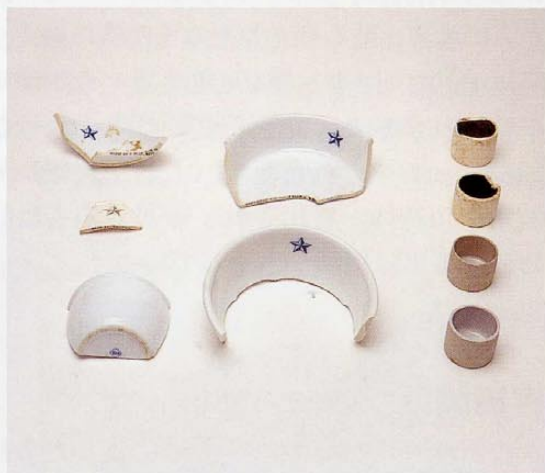
戦時中に設けられた旧軍施設は、記録が少なく必ずしも明らかにはなっていません。最近ではこうした近現代の遺跡が調査される機会が増え、戦跡考古学という新たな研究分野が注目されるようになりました。三重県下では、津海軍工廠があった高茶屋大垣内遺跡、陸軍第一気象連隊が置かれた石薬師東遺跡、二空廠病院敷地を含む天王遺跡などが調査され、愛知・静岡では名古屋城三の丸遺跡・見晴台遺跡・吉田城址・下滝遺跡群など陸軍関係の諸施設が調査されています。

石薬師東遺跡 三重県鈴鹿市石薬師町字寺東

陸軍第一気象連隊が置かれた県立石薬師高校や消防学校のあたりは、石薬師東遺跡・石薬師東古墳群として周知されています。消防学校の建設に伴う調査では、60基以上の消滅墳が調査された他、戦時中のものと見られる遺構や軍用食器なども見つかりました。



瓦 三重県鈴鹿市 石薬師東遺跡
「群馬2」・「埼玉30」など統制番号が付されている



磁器碗・陶製容器 三重県鈴鹿市 石薬師東遺跡
緑色や青色の陸軍章が付けられている

天王遺跡 三重県鈴鹿市岸岡町字天王

現在の鈴鹿厚生病院敷地内には、第二海軍航空廠鈴鹿支廠の付属病院である二空廠病院がありました。戦後は日赤鈴鹿病院や市立伝染病院に引き継がれています。このあたりは天王遺跡に含まれ、病院建設等に伴って発掘調査が実施されています。コンクリートの建物基礎などが検出され、戦時中の建物との関係が検討されています。当時使用されていたと思われる磁器製の食器が出土しています。



磁器皿 三重県鈴鹿市 天王遺跡
二空廠病院で使用されていたものか

陸軍第一航空軍教育隊

現在の白鳥レイクタウン付近には陸軍第一航空軍教育隊（陸軍中部132部隊のちに陸軍東海581部隊に改編）がありました。陸軍航空隊員の教育が行われ、機上訓練には近くの北伊勢陸軍飛行場が使用されました。現地には倉庫や兵舎の基礎が残っています。

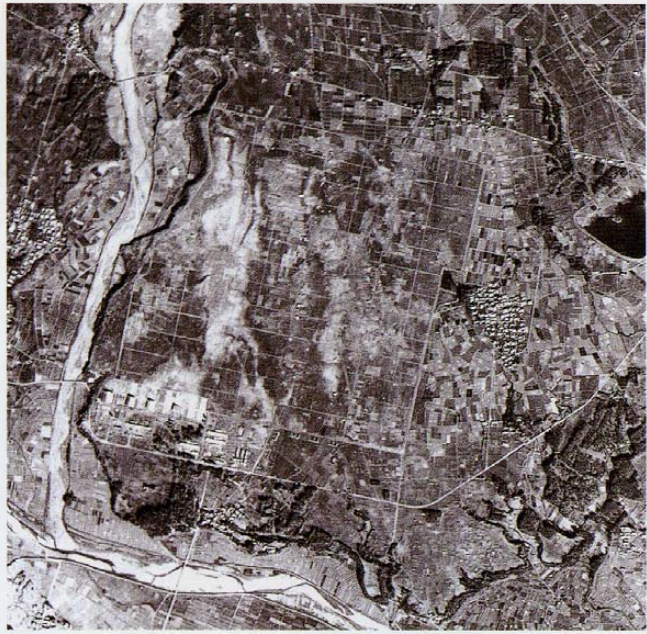
鈴鹿市広瀬町から亀山市能褒野町にまたがる北伊勢陸軍飛行場は、陸軍明野飛行学校の分教場として昭和17（1942）年に設置されたものです。能褒野町には正門や格納庫の一部が残っています。戦後は開拓され、現在では耕地や企業敷地として利用されています。



コンクリート製掩体壕 鈴鹿市三畑町に残る



陸軍追分飛行場 この空中写真は、米軍撮影の空中写真を国土地理院長の承認を得て複製したものである。（承認番号 平14総復、第136号）



北伊勢陸軍飛行場 この空中写真は、米軍撮影の空中写真を国土地理院長の承認を得て複製したものである。（承認番号 平14総復、第136号）

この飛行場の北に隣接する三畑町には、コンクリート製の掩体壕が残っています。空襲に備え、航空機を格納する施設で残存例の少ない貴重な遺構です。

昭和18（1943）年には、北伊勢陸軍飛行場の北に陸軍追分飛行場が造られました。北伊勢陸軍飛行場の機能を補完する目的で造られた秘匿飛行場のようなのですが、その実態ははっきりしません。未舗装であったこの飛行場はほとんどその痕跡をとどめていませんが、戦後まもなく米軍により撮影された空中写真には十字形の滑走路が写っています。周辺には土製やコンクリート製の掩体壕が数多く設けられましたが、すべて撤去されました。



電話線支柱 名古屋一大阪間の電話線支柱、北伊勢飛行場の建設により南へ移設された

見晴台遺跡 愛知県名古屋市

弥生時代の環濠集落として知られる見晴台遺跡には、名古屋市内の軍事工場を守るために設けられた笠寺高射砲陣地がありました。発掘調査により、高射砲の配置が明らかになり、関連遺物が多く得られています。



兵舎跡 見晴台考古資料館提供 見晴台遺跡

発掘された戦争遺跡—都市空襲の跡—

最初の都市空襲は、第一次世界大戦にさかのぼり、ドイツの飛行船による1915年のロンドン空襲でした。第二次世界大戦では戦闘機による都市空襲が本格化し、昭和12（1937）年の日中戦争開始とともに日本軍による中国各都市への爆撃が行われました。日本への初めての空襲は、米軍による昭和17（1942）年のもので、三重県では長島町や四日市市で被災がありました。昭和19（1944）年、サイパン・グアム・テニアンに米軍B29の爆撃基地が確保され、レイテ湾海戦により世界屈指の戦力を誇った連合艦隊が壊滅的打撃を受けると、本土空襲は本格化し、軍需工場への空襲、次いで大都市・中小都市への大規模無差別爆撃が行われました。三重県における最も大きな被災地は津市で、死者2500人以上と云われています。鈴鹿市では算所・柳・玉垣・神戸・稲生などで被害がありました。



被熱ガラス 四日市代官所跡 三重県四日市市



B-29破片
昭和20（1945）年6月5日、空中戦の末、名張市青蓮寺に墜落したもの



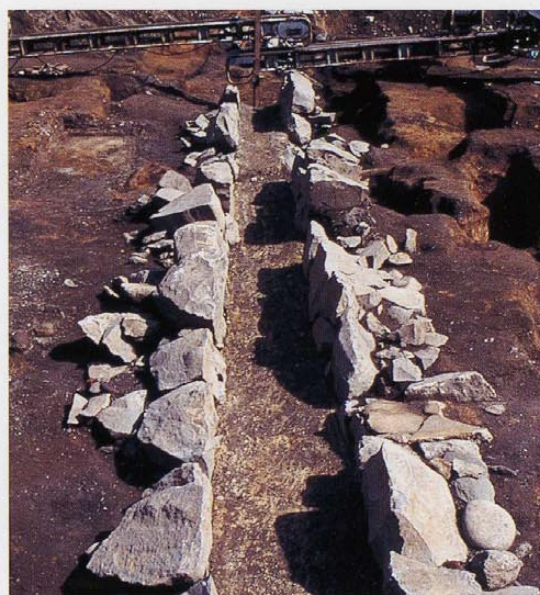
M74焼夷弾 昭和20（1945）年7月28日空襲のもの
ヲノ坪窯跡 三重県津市一身田



E46集束焼夷弾模型

名古屋城三の丸遺跡 愛知県名古屋市

陸軍では、明治6（1873）年に東京・仙台・名古屋・大阪・広島・熊本の各鎮台が設けられ、国内の治安維持体制が整いました。明治22（1889）年には外征態勢確立をめざした師団制に改められます。名古屋には第3師団が置かれ、名古屋城三の丸遺跡では^{しちよう}輜重兵舎や陸軍病院跡が調査されています。



排水溝 見晴台考古資料館提供 名古屋城三の丸遺跡 愛知県名古屋市

下滝遺跡群・半田山Ⅲ遺跡・瓦屋西Ⅱ遺跡 静岡県浜松市半田町

航空自衛隊浜松基地のあたりには、浜松陸軍飛行学校や陸軍第七航空教育隊・三方原教導飛行団があり、戦争末期には遠州灘からの米軍上陸を想定した本土決戦に備えて、陸軍第143師団歩兵第409連隊第1大隊陣地が築かれました。発掘調査では本土決戦部隊によって残された塹壕（人員用掩壕）や航空機用掩体が発見され、陸軍食器をはじめとする軍隊用品が出土しています。



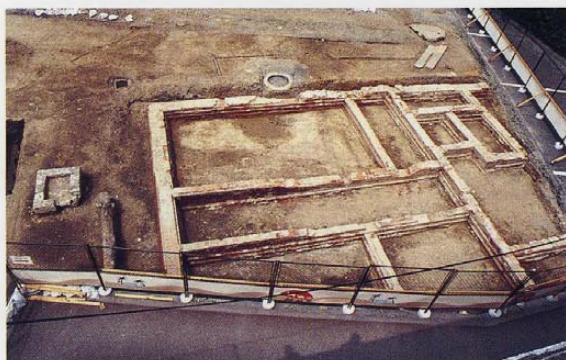
航空機用掩体 浜松市博物館提供 瓦屋西Ⅱ遺跡 静岡県浜松市

吉田城址 愛知県豊橋市

吉田城址には陸軍第3師団に属した歩兵第18連隊連兵場が設けられました。発掘調査によって建物基礎などが見つかっています。



塹壕 浜松市博物館提供 瓦屋西Ⅱ遺跡 静岡県浜松市



陸軍歩兵第18連隊大隊本部 豊橋市教育委員会提供
吉田城址 愛知県豊橋市



陸軍歩兵第18連隊砲座跡? 豊橋市教育委員会提供
吉田城址 愛知県豊橋市

展示資料一覽

No.	資料名	遺跡名・関連施設名	所在地	保管者
1	焼夷弾	ヲノ坪遺跡	津市一身田上津部田	三重県埋蔵文化財センター
2	磁器碗・皿(陸軍食器)	石薬師東遺跡(4・5次)	鈴鹿市石薬師町	三重県埋蔵文化財センター
3	瓦	石薬師東遺跡(4・5次)	鈴鹿市石薬師町	三重県埋蔵文化財センター
4	陶製容器	石薬師東遺跡(4・5次)	鈴鹿市石薬師町	三重県埋蔵文化財センター
5	陶器土管	石薬師東遺跡(4・5次)	鈴鹿市石薬師町	三重県埋蔵文化財センター
6	磁器碗・皿(陸軍食器)	石薬師東遺跡(11・12次)	鈴鹿市石薬師町	三重県埋蔵文化財センター
7	陶製容器	石薬師東遺跡(11・12次)	鈴鹿市石薬師町	三重県埋蔵文化財センター
8	瓦	石薬師東遺跡(11・12次)	鈴鹿市石薬師町	三重県埋蔵文化財センター
9	機銃弾	上箕田遺跡	鈴鹿市上箕田町	鈴鹿市考古博物館
10	被熱ガラス	四日市代官所跡	四日市市	四日市市教育委員会
11	磁器無蓋小鉢	下滝遺跡群	浜松市半田町	浜松市博物館
12	磁器有蓋小鉢	下滝遺跡群	浜松市半田町	浜松市博物館
13	磁器蓋付小壺(瀬戸)	下滝遺跡群	浜松市半田町	浜松市博物館
14	インク瓶蓋	下滝遺跡群	浜松市半田町	浜松市博物館
15	ペークライト?瓶	下滝遺跡群	浜松市半田町	浜松市博物館
16	ペークライト?銃口覆い	下滝遺跡群	浜松市半田町	浜松市博物館
17	アルミ水筒	半田山川遺跡	浜松市半田町	浜松市博物館
18	磁器碗(陸軍食器)	半田山川遺跡	浜松市半田町	浜松市博物館
19	ペークライト碗	半田山川遺跡	浜松市半田町	浜松市博物館
20	陶製容器	半田山川遺跡	浜松市半田町	浜松市博物館
21	ガラス瓶	半田山川遺跡	浜松市半田町	浜松市博物館
22	磁器湯飲み	半田山川遺跡	浜松市半田町	浜松市博物館
23	ガラス瓶	半田山川遺跡	浜松市半田町	浜松市博物館
24	磁器皿	天王遺跡	鈴鹿市岸岡町	鈴鹿市考古博物館
25	被熱ガラス等	竪三蔵通遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
26	磁器薬瓶蓋	竪三蔵通遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
27	焼土	竪三蔵通遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
28	土人形	高蔵遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
29	磁器碗(国民食器)	津賀田古墳	名古屋市中区	見晴考古資料館
30	磁器湯飲み(国民食器)	津賀田古墳	名古屋市中区	見晴考古資料館
31	おろしがね磁器代用品	津賀田古墳	名古屋市中区	見晴考古資料館
32	歯ブラシ	津賀田古墳	名古屋市中区	見晴考古資料館
33	焼夷弾	津賀田古墳	名古屋市中区	見晴考古資料館
34	通信用送話器	見晴台遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
35	三八式野砲取り付け具	見晴台遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
36	大砲用備品(ハンドル)スパン	見晴台遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
37	大砲歯車等	見晴台遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
38	砲弾用レンチ・ヤットコ等	見晴台遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
39	砲弾用レンチ等	見晴台遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
40	工具セット	見晴台遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
41	大砲用金具・ねじまわり等	見晴台遺跡	名古屋市中区	見晴考古資料館
42	焼夷弾	桑名城下町遺跡	桑名市	桑名市教育委員会
43	機銃弾	蘇原東山遺跡群	各務原市	各務原市埋蔵文化財調査センター
44	焼夷弾(破片一式)	蘇原東山遺跡群	各務原市	各務原市埋蔵文化財調査センター
45	防衛食陶製容器蓋	加納城跡	岐阜市	岐阜市教育委員会
46	被熱瓦	加納城跡	岐阜市	岐阜市教育委員会
47	被熱ガラス	加納城跡	岐阜市	岐阜市教育委員会
48	E46集束焼夷弾(模型)			岐阜市
49	ヤスリ	鈴鹿海軍工廠機銃部	三重県鈴鹿市	個人
50	内径バス	鈴鹿海軍工廠機銃部	三重県鈴鹿市	個人
51	外径バス	鈴鹿海軍工廠機銃部	三重県鈴鹿市	個人
52	打刻器	鈴鹿海軍工廠機銃部	三重県鈴鹿市	個人
53	たがね	鈴鹿海軍工廠機銃部	三重県鈴鹿市	個人
54	万力	鈴鹿海軍工廠機銃部	三重県鈴鹿市	個人
55	卒業証書	鈴鹿海軍工廠機銃部	三重県鈴鹿市	個人
56	工員印	鈴鹿海軍工廠機銃部	三重県鈴鹿市	個人
57	木製食器	鈴鹿海軍工廠機銃部	三重県鈴鹿市	個人
58	13mm機銃弾	豊川海軍工廠	愛知県豊川市	個人
59	B29破片		三重県名張市	個人
60	行燈			個人
61	木製銃			個人
62	ハンモック	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
63	パラシュートの紐	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
64	パラシュートの金具	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
65	消火栓	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
66	制水弁蓋	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
67	分銅	鈴鹿海軍工廠火工部	三重県鈴鹿市	個人
68	秤	鈴鹿海軍工廠火工部	三重県鈴鹿市	個人
69	試験管	鈴鹿海軍工廠火工部	三重県鈴鹿市	個人
70	ガラス瓶	鈴鹿海軍工廠火工部	三重県鈴鹿市	個人
71	温度計	鈴鹿海軍工廠火工部	三重県鈴鹿市	個人
72	薬品	鈴鹿海軍工廠火工部	三重県鈴鹿市	個人
73	ガラス乳鉢	鈴鹿海軍工廠火工部	三重県鈴鹿市	個人
74	ガラス乳棒	鈴鹿海軍工廠火工部	三重県鈴鹿市	個人
75	工具募集ポスター(複製)	鈴鹿海軍工廠火工部	三重県鈴鹿市	個人
76	海軍工員心得(複製)	鈴鹿海軍工廠火工部	三重県鈴鹿市	個人
77	羅針儀	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
78	落下傘バッグ	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
79	ライフジャケット	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
80	飛行帽(冬用)	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
81	飛行帽(夏用)	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
82	飛行めがね	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
83	飛行手袋	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
84	飛行時計	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
85	水筒(2点)	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
86	下士官用バンド	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人
87	通信機用電鍵	鈴鹿海軍航空隊	三重県鈴鹿市	個人

主な参考文献

花井圭一・仲見秀雄1989『鈴鹿市史第3巻』鈴鹿市教育委員会／三重県歴史教育者協議会1988『三重の戦争遺跡』

謝辞 本書の作成と展示に際し、下記の諸氏・機関の御助言・御協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

秋元治樹・浅尾悟・伊藤厚司・岩脇彰・内堀信雄・太田好治・小河清角・葛山拓也・川端由紀子・小林久彦・菊池三郎・斉藤理・谷奈緒美・辻正・中川博之・花井圭一・広田隆学・船越重伸・水野裕之・湊谷鉄雄・森尾忠信・森田忠則・山路伸一・吉水康夫・渡辺博人・NTT西日本・各務原市教育委員会・香良洲町教育委員会・香良洲町歴史資料館・岐阜市・岐阜市教育委員会・桑名市教育委員会・国土地理院・豊橋市教育委員会・浜松市博物館・三重県埋蔵文化財センター・見晴考古資料館・四日市市教育委員会 (順不同・敬称略)

関連講座 「鈴鹿市の軍事遺跡」

講師：浅尾悟氏(鈴鹿市立創徳中学校教諭)

日時：平成14年7月21日(日)午後2時から

例言

1. 本書の編集執筆は新田剛が担当した。
2. 写真の提供を受けた機関は各々付記した。

編集発行：鈴鹿市考古博物館

〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地

PHONE:0593-74-1994 FAX:0593-74-0986

kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp

http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/

発行日：2002.7.20

印刷：有限会社中村特殊印刷工業